

文語詩のことならおもしろい

信時哲郎

文語詩のことならおもしろい。しかし、そう書いてみても、なかなか信じてもらえないかもしれない。賢治が最晩年にまとめた文語詩は読みにくく、口語詩や童話のカラフルさにくらべると魅力に乏しいと感じられるのも仕方がないと思うからだ。かく言う私も、学生時代には文語詩などろくに読んでいなかったのだが、近年、「文語詩稿 五十篇」と「文語詩稿 一百篇」の評釈をひとつとおり終えたところで率直な感想を述べれば、「文語詩のことならおもしろい」。

例えば「一百篇」の「羅紗売」をあげてみたい。次のように始まる詩だ。

バビロニ柳掃ひしと、 あゆみをとめし羅紗売りは、
つるべをとりてやゝしばし、 みなみの風に息づきぬ。

ラシャ（厚手の毛織物の一種）を売り歩く商人が井戸で休息していたのだろう。しかし、当時、ラシャの行商人と言えば、島田隆輔氏が指摘するように、革命を逃れて日本にやってきた白系ロシア人が従事するものとされていたようだ。おそらく岩手県内の取材に基づくものであろうが、井戸で水をくみ上げているのが外国人だと思うと、ずいぶん印象が変わって来ないだろうか？

また、「バビロニ柳」の語は、シダレヤナギ（学名：Salix babylonica）を言い換えただけのように思われそうだが、井戸で水を汲んでいる人物が、革命で国を追われてきた白系ロシア人であると考えれば、バビロン捕囚、すなわちユダヤ人たちがユダ王国からバビロンに強制移住させられた史実が下敷きになっていたと想像する余地が生まれて来る。『聖書』の「詩篇 137」に「われらバビロンの河のほとりにすわり シオンをおもひいでて涙をながしぬ われらそのあたりの柳にわが琴をかけたなり」とあるが、賢治の頭には、こうしたイメージが浮かんでいたようにも思えるのである。

同じく「一百篇」の「[すゝきすがるゝ丘なみを]」を見てみたい。

すゝきすがるゝ丘なみを、 にはかにわたる南かぜ、
窪てふ窪はたちまちに、 つめたき渦を噴きあげて、
古きミネルヴァ神殿の、 廃址のさまをなしたれば、
ゲートルきりと頬かむりの、 闘士嘉吉もしばらくは、
萱のつぼけを負ひやめて、 面あやしく立ちにけり。

ススキの丘を南風が吹きすぎると、複雑な乱気流が起こってススキがミネルヴァ神殿のような姿になったという詩で、農村のユーモラスな挿話に思える。ゲートルとは満州事変

後に一般に普及した西洋式の脚絆きよはん（足を保護するため足の甲からヒザまで巻いた布製品）のことだが、農夫と思われる嘉吉がゲートルを巻いているのは、大正 15 年以降、小学校を卒業した青年を対象とした軍事教練が始まったが、その経験者だということが反映されているのではないかと考えられる。「闘士」とあるのは、ローマ帝国の時代の人間を模した表現にも受け取れるが、次第にきな臭くなっていく日本の状況を詠み込んでいたようにも思えるのである。

当時の状況を調べてみると、いろいろなことが見えてくるという例を挙げたが、文語詩をじっくり読み込むことによって作品世界が開けてくるものもある。その筆頭に上げたいのは、これもまた「一百篇」の作品である「風底」だ。わずか二行のみの作品である。

雪けむり閃めき過ぎて、　ひとしばし汗をぬぐへば、
布づつみになふ時計の、　リリリリとひゞきふるへる。

雪の中なのに汗をかくくらいなので、そうとうな距離を歩いてきているのだろう。その瞬間に、何かのきっかけでストッパーがはずれた目覚まし時計が、包みの中から鳴りだした、という内容だ。当時の目覚まし時計は、電池で動く 24 時間式の時計でなく、12 時間に一度ずつ鳴るゼンマイ式のものだったはずだから、ちょうどこの 12 時間前に、旅人は目を覚ましたのだろう。雪けむりが閃き過ぎていくのだから、まだ明るい時間帯なのだろうが、となると午前 3 時か、遅くとも 4 時くらいに目覚まし時計をセットしていたということになる。時計の行商人のようにも思われそうだが、商品の時計のネジをわざわざ捲く商人はいないだろうし、ネジは毎日捲いておかないと動かなくなってしまうことを思えば、やはり泊りがけで旅行している最中の旅人を書いた作品だということになるだろう。つまり、この人物は、まだ夜中とも言うべき時間からずっと行動をとり続け、今、起きてから 12 時間たったということを、ふいに目覚まし時計によって知らされたというわけである。壮大な自然の景観にユーモアが添えられ、しかも厳しい仕事の様子も伝わってくるという詩で、労働詩としても秀作だと言っていいかと思う。描かれているのは、重たい炭酸石灰の製品見本を持ち歩いていた賢治自身なのだろうか…

口語詩や童話は、数十年の研究の積み重ねによって、いろいろなことがわかってきた。文語詩研究は、今、ようやく始まったという段階だが、それだけに新しいことがザクザクと見つけ出されている。取っつきやすさがないことは認めざるを得ないが、お宝発見の確率はきわめて高い。宝の山を探検するための手引き書ともなる「文語詩稿 五十篇」と「文語詩稿 一百篇」の評釈は、ネットでも読むことができるようにしているので、まずは興味を引く字句やテーマのある作品から読み始めてもらえれば、そのおもしろさの一端を実感してもらえるのではないか、と思う。

(<http://www.konan-wu.ac.jp/~nobutoki/papers.html>)

2017.9 (H29)

